

論文

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について

—「プラトニズムの転倒」と時間論の観点から—

黒木 萬代*

The Concept of “Surface” as the Rupture between *Différence et Répétition* and *Logique du Sens*

An Approach from the Viewpoint of the Overturning of Platonism and Time Theory

KUROKI Mayo

論文要旨

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの 1960 年代の主著である『意味の論理学』(1969) とフェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』

(1972) の間には、周知のように大きな断絶がある。ドゥルーズは、『意味の論理学』について後年、次のようなことを述べている。『意味の論理学』は、一方では『差異と反復』(1968) と同じ諸概念を用いているが、他方では古典的な高さと古代的な深さを必要としていた『差異と反復』では見出されなかった「表面」という新しい次元にしたがってそれらを再構成したのだ、と。したがって、後年のガタリとの共著以降においてみられる思想上の変化は、単にガタリによってもたらされた受動的なものにはとどまらず、ドゥルーズ自身のなかで、すでに『差異と反復』と『意味の論理学』の間の、決して小さくない断絶としてすでにある程度は用意されていたのではないか。本稿では、この問題意識の下、両著作に加えて、『ザッヘル=マゾッホ紹介』

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程；
m.kuroki.358@gmail.com

(1967) に言及することによって、『差異と反復』と『意味の論理学』のあいだの断絶について論じる。

キーワード プラトニズムの転倒、死の本能、表面、時間、アイオーン

Abstract

As is well known, there is a rupture between *Logique du sens* (1969), the main work of the French philosopher Gilles Deleuze in the 1960s and, *L'Anti-Œdipe* (1972), co-authored with Félix Guattari. Deleuze says about *Logique du sens*: On the one hand, in that work, he used the same concepts as in *Différence et répétition* (1968), but on the other hand, he reconstructed these concepts according to a new dimension of “surface” that was not found in *Différence et répétition* which still required classic height and ancient depth. Therefore, it seems that the changes that had been seen since the co-authorship with Guattari are not only the passive ones brought by Guattari, but also within Deleuze himself, have already been prepared to some extent as a not small rupture between *Différence et répétition* and *Logique du sens*. In this paper, we discuss the rupture between *Différence et répétition* and *Logique du sens* by referring to *Présentation de Sacher-Masoch* (1967) in addition to them from this viewpoint.

Keywords: the overturning of Platonism, the death instinct, surface, time, Aiôn

1. はじめに⁽¹⁾

ジル・ドゥルーズは 1976 年に出版されたイタリア語版『意味の論理学』に「覚え書き」⁽²⁾を寄せているが、そのなかで 1969 年に出版された『意味の論理学』⁽³⁾に関して、1968 年に出版された『差異と反復』⁽⁴⁾と同じ諸概念を用いながらも古典的な高さと古代的な深さを必要としていた『差異と反復』では見出されなかった「表面」という新しい次元にしたがってそれらを再構成した著作であると述べている。そして、それはドゥルーズにとって「断絶を示す」著作でもあった (DRF 58) ⁽⁵⁾。しかし、この著作が示す「断絶」は二重のものである。一方には、周知のように精神分析に依拠しつつ展開された 1960 年代の著作と苛烈な精神分析批判が開始される 1972 年出版の『アンチ・オイディプス』とのあいだの大きな断絶がある。他方で、ドゥルーズ自身が語るようにこの著作は初めて伝統的な哲学の形式とは違うやり方で哲学することを探求したものであり、古典的高さと古代的深さと決別を試みたという点で、『差異と反復』とのあいだにも決して小さくない断絶があるように思われる。本稿では、ドゥルーズの思想全体、とりわけその後期思想のなかで、この小さな断絶が、どのように展開されていくことになるのかを明らかにする足掛かりを得るために、プラトニズムの転倒、時間論、サディズムとマゾヒズムをキーワードに、後者の「断絶」について探っていく。

2. プラトニズムの転倒の二つの方法としてのサディズムとマゾヒズム

「現代哲学の務めは、プラトニズムの転倒と定義された」 (DR 82)。人口に膾炙し、幾度となく引かれてきた一文であろう。この一文が記されている 1968 年出版の『差異と反復』の前年、つまり 1967 年に出版された『ザッヘル=マゾッホ紹介』⁽⁶⁾においてもこの問題がその全体を貫いている。しかし、

この著作が特異であるのは単にプラトニズムの転倒が試みられているという点ではなく、プラトニズムを転倒するための方法論としてサディズムとマゾヒズムが語られる点である。そこで、ドゥルーズは精神分析によるサディズムを基軸にしたマゾヒズム理解、すなわち能動と受動の相補性をベースにして、自己に向けられたサディズムがすなわちマゾヒズムであるというサディズム＝マゾヒズムの等式を批判し、サディズムから独立して展開されるマゾヒズム固有の世界を示した。つまり、サディズムとマゾヒズムはプラトニズムを転倒するためのそれぞれ異なるアプローチであるということだ。

まず確認しておくべきことは、『マゾッホ紹介』で提示されるプラトニズムの転倒の方法としてのサディズムとマゾヒズムは、カントによるプラトニズムの転倒のその先を模索するものであるという点である。カント以降「法」はいかなる高次の原理にも依拠しえず、「善」は「法」に依存するものになった。したがって、わたしたちが遂行すべきプラトニズムの転倒は、「善」というモデルを頂から引きずり下ろすことではもはやなく、コピーとシミュラクルとの間に引かれる「法」に対する戦いである。フロイトによれば、経験的世界の外部を思考する方法は「思弁的」なものか「神話的」なものしかない。ドゥルーズは前者を「イロニー」、「サディズム」の道として、後者を「ユーモア」、「マゾヒズム」の道として提示する。これらはどちらも元をたどればプラトンが用いた古典的な「イロニー」と「ユーモア」、つまり「無限に高次の〈善 *Bien*〉に法を基礎づけようとする思考の戯れ」(＝「イロニー」)と「無限により正しい〈最善 *Mieux*〉によって法を裏付けようとする思考の戯れ」(＝「ユーモア」)に辿り着く(PSM 72)。しかし、既に述べたように、カントによって「善」と「法」は逆転した。ゆえに、この変化に応じて「イロニー」も「ユーモア」も変化を被ることになる。また、カントの乗り越えとしてのプラトニズムの転倒がその先に見出すべきものは、「死の本能 *l'instinct de mort*」であると言われている。ところで、この「死の本能」をめぐる、わたしたちは次のような問いを提出したい。その二つの異なる道を進んだ先に現れるそれは果たして同じ姿をしているのだろうか。すなわち、行き止まりを見せる「このサ得的な思弁的方法のほかに、ま

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代

だ別の「方法」はないのだろうか」(PSM 28)と問われるとき、マゾッホが答える「死の本能」の姿はサドの想定するそれとは違うものではないのか。以下にサディズムとマゾヒズムを「死の本能」の観点から簡単に整理しよう。

2.1 「サディズム」における「死の本能」

サドの文学作品で問われているものは「否定の広がり全体、否定の深さ *profondeur* の全体」⁽⁷⁾である (PSM 24)。わたしたちの経験しているこの世界は「二次的自然 *la nature seconde*」とされる。すなわち死が絶対的な「否定」としてではなく結局は生と手を結び「部分過程としての否定的なもの」(PSM 24)しか示し得ない世界であり、ここでの死とは「人称的な死」のことである。この「二次的自然」や「人称的な死」を乗り越えるために、サディズムにおいては「イロニー」、すなわち「法に二次的な権力しか認めないために、より高次の原理の方へと法を乗り越える運動」(PSM 75)を用いる。そうして目指される「一次的自然の理念 *l'idée d'une nature première*」あるいは「〈悪〉の〈理念〉」が「非人称的な死」としての「死の本能」である。また、この自然は「本源的自然 *la nature originelle*」とも呼ばれる。

タナトスは常にエロスと結合した形でしかわたしたちに与えられることはなく、このエロスとの結合が沈黙するタナトスの現前化の条件となる。しかしこのようにエロスと結合されたタナトス、すなわち「死の欲動」は絶対的な否定性は持ちえず、常に快原理に従属させられている。このようにエロスとの結合を避けることができない「二次的自然」において死は「人称的な死」であり、部分的な否定しか示しえない。一方、「非人称的な死」は決して与件として示されることのない沈黙した「タナトス」そのもの、「全体化する〈理念〉としての純粹否定 *la négation pure comme Idée totalisante*」(PSM 24)としての「死の本能」である。それは、快原理に従属することはないどころか、快原理を可能にする超越論的な原理だ。そして、この「死の本能」は「あらゆる底 *fond* を越えた底無し *sans fond*、本源的錯乱、狂暴で引き裂

くような諸分子のみからなる原初の「カオス」⁽⁸⁾ (PSM 25) である。また、サディズムにおいてはそのような「純粹否定」＝「絶対悪」としての「死の本能」が目指すべき「より高次の原理」として固定的に設定されている。したがって、「善」という頂点が成す「高さ」を示すヒエラルキーとは逆向きの、「死の本能」を頂点とする「深さ」を示すヒエラルキーが築かれると思われる。

2.2 「マゾヒズム」における「死の本能」

マゾヒズムにも二つの自然があるが、それらの区別はサディズムの「二次的自然」と「一次的自然」の区別とは一致しない。ここでは、サディズムにおける二つの自然の配分とは異なる配分がなされている。そしてその配分の差異において重要であるのは、サディズムにおける「死の本能」、「一次的自然」としての「カオス」とのズレ、さらにそのズレによって「カオス」の内に生み出される二つの次元であるように思われる⁽⁹⁾。すなわち、「暴力と謀略、憎悪と破壊、無秩序と官能性がいたるところで働いている」、「粗暴な自然 *la nature grossière*」と「非人称的にして反省＝反射された *réfléchie*、感情的にして超官能的な大なる〈自然〉 *la grande Nature*」(PSM 49) である。ここではもはや経験的な世界に対するカオスの優位性が争われているのではない。マゾヒズムにおいてはサディズムのようにこの経験的世界の内部で「部分否定」によって経験的世界の外部である「純粹否定」を論証しようとするのでも、そのような外部としての「純粹否定」によって内部としての経験的世界が永遠に滅ぼされなければならないという対立構造が設定され、「純粹否定」による外部の一元化が目指されるのでもない。マゾヒズムはこの世界を「否定」するのではなく、この世界を「否認」することによって、つまり、快原理に支配されているこの世界があるということ認めないことによって、サディズムにおける内部と外部の対立構造そのものを「宙づり」にする。

それゆえ、必要なことは、世界を否定することでも、世界を破壊することでもなく、ましてや世界を理想化することでもない。重要なのは、ファンタスムのなかで宙づりにされている理想それ自体へと己を開くために、世界を否認すること、否認しながら世界を宙づりにすることである。(PSM 30)

また、したがって「イロニー」が求める絶対的根源としての「善」や「悪」というような目指されるべき頂点を放棄するのである。マゾヒズムは「法から帰結へと下降する運動」である「ユーモア」を体現する(PSM 77)。むしろとことん法に従うことによって、法の不条理を暴くとともに、法自身から法が禁じる結果をもたらそうとするのだ。そこにはもはやヒエラルキーは存在せず、「非人称的にして反省＝反射された、感情的にして超官能的な大いなる〈自然〉」としての草原がその平面性を誇るばかりである。また、そのような「粗暴な自然」から「大いなる〈自然〉」への移行は次のようなマゾッホの歩みと共鳴する。「マゾッホは、小説芸術を定義しながら、「形象」から「問題」へと向かわなければならないと、すなわち、強迫的なファンタスムから出発して問題にまで上昇すること、そこで問題が立てられる論理的構造にまで上昇することが必要なのだと語っていた」(PSM 47-48)。そして、そこでこそマゾッホの小説に一貫するテーマである父無しに母の力のみで生まれ直すこと、すなわち「単為生殖的な第二の誕生」を可能にするマゾヒズム固有の「死の本能」が見出されるのではないか(PSM 87)。マゾヒズムとは、必然的に有性生殖を前提することで性をもたらす者、すなわち法としての父を必要とすることのない、このような生まれ直しによって「性をもたない新しい人間」(PSM 31)になることを目指す実践である。

以上のように、ドゥルーズ自身が『マゾッホ紹介』のなかでは明示的に説明していないため彼がどの程度まで自覚的であったかを見極めることは困難であるにしても、サディズムとマゾヒズムのあいだには、プラトニズムの

転倒や「死の本能」への異なるアプローチという以上の差異、すなわち「サディズム」と「マゾヒズム」がそれぞれに見出そうとする「死の本能」の姿にかんする明らかな「ズレ」がある。ところが、決して小さくはないこの「ズレ」が『差異と反復』における時間論、とりわけ第三の時間の総合と「死の本能」をめぐる議論においては、軽視されているように思われるのである。

3. 第三の時間の総合と死の本能

『差異と反復』の時間を差異のシステム⁽¹⁰⁾として論じる第二章では、第三の時間の総合を精神分析的に解釈する場面で「サディズム」と「マゾヒズム」という用語が唐突に現れる (DR 151)。第三の時間は精神分析的に言い直される時「死の本能」という名を持つ。すでに確認したとおりにそれを見出す方法としてドゥルーズは『マゾッホ紹介』でサディズムとマゾヒズムを論じたのであった。ゆえに、一見場違いなようであっても、第三の時間の総合の議論においてサディズムとマゾヒズムが出てくることは必然的なことなのである。この点に着目し、モニク・ダヴィド＝メナールは『マゾッホ紹介』と『差異と反復』の一貫性を、とくに『差異と反復』の第二章の時間論を俎上にあげ論じている。ダヴィド＝メナールの言うように、「混乱しているとみなされている快の概念にかんして距離を置くテキストである『マゾッホ紹介』(1967) と、欲望を時間の哲学のなかに組み入れ、差異の概念を用いて充足の諸イメージから快を解き放つ書物である『差異と反復』(1968) におけるドゥルーズの思考の一貫性を描き出してみる価値はある」⁽¹¹⁾ のである。しかし、ここにおいて重要な問題は、あれほど『マゾッホ紹介』において「サド＝マゾヒズム」という一体性を非難し、それぞれの独立した世界を詳細に論じたにもかかわらず、またその上でサディズムよりもマゾヒズムの道に光明を見出していたにもかかわらず、ドゥルーズは第三の時間の総合の議論において、サディズムとマゾヒズムのあいだにある方法論的な差異やまた見いだされるべき死の本能の差異について非常に無頓着であるということだ。

確かに、ドゥルーズは「死」というものの二つの次元を厳密に分けることを要求する。それはつまり、ドゥルーズがブランショを引きながら論じるつぎのような二つの区別である。一方は、死の人称的なアスペクト、すなわち経験的世界において「私が闘争のなかで立ち向かうことができるもの、あるいは限界のなかで辿り着くことができるもの」、「現在のなかで出会うことができるもの」である。他方は、非人称的なアスペクト、すなわち「現在でもなければ過去でもなく、つねに来るべきもの」であり、「私」が経験することができない死である (DR 148)。「死の本能」は非人称的なアスペクトに該当するものだ。しかし、サディズムとマゾヒズムで問題となっているのは、その二つの側面の区別ではない。そうではなく、サディズムとマゾヒズムのあいだの差異は非人称的な死のアスペクト＝「死の本能」を見出す際に、「人称的な死」を伴うか伴わないかという点であり、さらに重要な点は両者において見出されるべき「死の本能」の姿の不一致である。「人称的な死」と「非人称的な死」が自殺においてさえ一致することの無い死の二つのアスペクトであったとしても、つまり「私」として「非人称的な死」を体験することができないとしても、それでもなお「非人称的な死」が常に「人称的な死」を伴わずにはいられないような、さらに、すべてが完全なる混沌へと溶解してしまうようなサディズム的な破壊性について考慮することがここでは必要とされていないのである。しかし、第三の時間の総合の破壊性がシステムとして機能することが可能であるためには、そのようなサディズム的破壊性は避けられなければならないはずである。したがって、「未分化な底、底一無し、形態なき非一存在、差異も特性もない深淵」(LS 129)に陥らずに差異のシステムが成り立つためには、死の二つの側面を切り離すだけでは不十分なのではないか。このような形而上学と超越論哲学に共通する二者択一、すなわち「この〈存在〉やこの〈形態〉の外では、あなたにはカオスしかないだろう」(LS 129)という脅し文句の意味でのカオスは、わたしたちの議論のなかで位置づけ直せば、サディズム的カオスと不可分ではないだろうか。

『差異と反復』第二章で展開される時間論は、第一の総合、第二の総合、

第三の総合へと進むに連れてより深くなり、第三の総合においてはもはや底無しの審級となっている。まるで「深さ」はこの著作においては美德であるかのようなのである。檜垣立哉 やダヴィド＝メナール が指摘するように、この時間の総合の理論はカントの『純粋理性批判』の構成を意識するとともに、それを乗り越えるような議論を展開している⁽¹²⁾。ダヴィド＝メナールは、第二版では削除された『純粋理性批判』第一版における三つの総合の議論⁽¹³⁾とドゥルーズによる時間の総合の議論との関連を（またその内容が全く別のものであることも）示唆している。ドゥルーズによれば、「すべての哲学者のなかで、超越論的なものの驚くべき領域を発見しているのは、まさにカントである」（DR 176）。しかしながら、それに続く箇所ではドゥルーズは『純粋理性批判』第一版での三つの総合に言及しながら、カントが結局「超越論的と呼ばれる諸構造を、心理学的な意識の経験的諸行為を引き写すことによって描いている」ことを批判している。このことを考慮すれば、『差異と反復』の第二章における三つの時間の総合がカントを用いたカントの乗り越え、徹底という企図を持つことは明らかである。そして、カントにおいて絶頂に達する「第三の総合、すなわち再認の総合」（DR 176）にたいして逆向きの頂点、第三の時間の総合、「死の本能」が設定されたのではないか。

『差異と反復』においては、第三の時間としての「死の本能」はシステムとして機能することを前提されており、そのようなシステムとしての「死の本能」は「マゾヒズム的死の本能」つまり「非人称的にして反省＝反射された、感情的にして超官能的な高次の〈自然〉」であるだろう。だが一方でその議論の枠組みや第三の時間の地位といったものはすでに論じたように「底無し」をその頂点とした深さに関するヒエラルキーをなしており、これは明らかにサディズム的な構図をとっている。実際、『差異と反復』では、永遠回帰の時間にかんして、「ただ二次的な自然を構成するにすぎない諸統治と諸法則の上」にある「本源的〈自然〉がカオスのまま存する無底」⁽¹⁴⁾が想定されている（DR 312）。また、『差異と反復』ではカオスの物質的で未分化的な側面は様々な場面で確かに触れられはするものの、それは贗の深さをもつものとしてすぐさま否定され消えていき、

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代

「カオスモス chaosmos」の影に隠れてしまう。しかし、そのとき底無しのかなかで結局それらの側面は一緒くたにされていないだろうか。それゆえに、『差異と反復』には「高所」と「深層」しかなかったのではないか。

以上の観点からすれば、その底無しの審級が「未分化な底、底 - 無し、形態なき非 - 存在、差異も特性もない深淵」に陥らずに、常に新しいものを発生させる時間のシステムであることの保証はどこにもないように思われる。そこでは、『マゾッホ紹介』において論じられたサディズムとマゾヒズムのあいだの差異が問われず、またしたがって両者のあいだにあった「死の本能」のズレが無くなってしまっているのである。

4. 『差異と反復』と『意味の論理学』におけるプラトニズムの転倒の変化

さて、わたしたちは、プラトニズムの転倒とサディズムとマゾヒズムの区別を用いて『差異と反復』と『意味の論理学』のあいだの断絶について考えてきたのであった。以下に、『差異と反復』第二章の終わりで語られるプラトニズムの転倒の図式と、4.2『意味の論理学』第一及び第二セリーでのストア派を用いたプラトニズムの転倒の図式を簡単にまとめ、比較しよう。

4.1 『差異と反復』第二章におけるプラトニズムの転倒の図式（DR 165-168）

プラトンが設けた真の区別は「モデル」と「コピー」の区別⁽¹⁵⁾ではなく、二種類の「イマージュ」のあいだ、つまり「コピー」（＝善いイマージュ）と「シミュラクル」（＝悪いイマージュ）の間にある⁽¹⁶⁾。しかし、プラトンにおいてはまだ表象＝再現前化の支配は絶対のものではなく、シミュラクルが追い払われなければならない理由は道徳的なものである。プラトンがモデルを置くことでシミュラクル＝悪いイマージュを選別し、追放しようとするとき用いられる分割法は、アリストテレスが指摘するように、必然性

を持っておらず、恣意的なものである (DR 83)。そして、そうであるがゆえに、理由なく選別し差異＝シミュラクルを作り出すこのプラトンによる分割法に、ドゥルーズはプラトニズムの転倒の可能性を見出す。つまり、ドゥルーズはプラトンのなかに「〈異＝他〉なるもの l'Autre」、「異＝他のモデル l'autre modèle」、すなわち生成が「己の類似に見合うものとしてのコピーに関与する欠如」ではなく、「それ自身がモデルであり偽 *faux* の力が展開される場としての偽なるもの *pseudos* の恐るべきモデルであるという可能性」を見出すのである。そしてそれはデカルトの「悪しき霊 *malin génie*」、「欺く神 *Dieu trompeur*」に相当するようなものであるとされる⁽¹⁷⁾。そのような「異＝他のモデル」によってもたらされるシミュラクルの勝利とは「諸コピーが内化している諸セリーの非類似のなかにコピー自身が沈みこみ、同時にモデルが差異の中に消えるとき、もはやどちらがコピーでどちらがモデルかわからなくなるということである (DR 168)。

4.2 『意味の論理学』第一及び第二セリーにおけるプラトニズムの転倒の図式 (LS 9-21)

『意味の論理学』の第一セリーでは、前節で確認した『差異と反復』におけるプラトニズムの転倒と基本的に同じ図式が提示され、プラトニズムの真の区別、すなわち、「コピー」と「シミュラクル」のあいだの区別が再度検討されている。そこでは、「コピー」が「限定され計測された事物と固定した質の次元」、「シミュラクル」が「測度なき純粹生成、真の狂気—生成 *véritable devenir-fou*」とも言われている (LS 9)。また重要な点としては、ここではこのプラトニズム的区別が「感覚的で物質的な物体そのもののなかに埋没している二元性」として捉え直されるとともに、「純粹生成」が「シミュラクルの物質 *la matière du simulacre*」とされ、その物質性が強調されている点である (LS 10)。またさらに重要な問題提起がここでなされる。ドゥルーズは、そのような「純粹生成」がアイデアの作用から逃れること、またそれを換言して、「現在」から逃れることを「純粹生成のパラドックス」の一つとして提示するのだが、それに加えて、もう一つのパラドックス的側面を指摘

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代
する。それが「無限同一性」、すなわち「プラスとマイナスの、余分と不十分の、能動と受動の、原因と結果の無限同一性」である（LS 10-11）。

ところで、第二セリーでは、このようなプラトンの区別とは異なる新たな区別が導入される。それは、ストア派による区別、①「物体 corps」及び「事物の状態 états de choses」と②「非物体的効果 effets incorporels」及び「出来事 événements」のあいだの区別である。この新たな区別が導入されることの意味は何であろうか。ドゥルーズによれば、「ストア派が行っている操作は、因果関係にまったく新しい切れ目を入れること」である（LS 15）。それは、原因間の連絡・統一性の次元（運命）と結果（＝効果）間の連絡・統一性の次元（そこではある効果はある効果の原因ではなく「準原因 quasi-causes」である）という新たな区別を設けることであり、因果関係を解離させることである。そして、この二元性は「哲学の大転覆をもたらす」のであり、それによって「プラトニズムの初めての大転倒」が為されると言われることになる（LS 16）。しかし、この「プラトニズムの転倒」は『差異と反復』でのそれとは異なるものである。というのも、このようにすべての原因性が物体に属するとなると、アイデアは「事物の表面における非情で不毛で非実効的なこの存在—外 extra-être へと落下」し、「観念的なもの、非物体的なものは、もはや一つの「効果」以外ではありえない」ということになるからである（LS 16-17）。そうすると、もはや「コピー」と「シミュラクル」というプラトニズム的区別、そして事物の深層のなかで争われていたそれらのあいだの戦いは不要になる。そして、「シミュラクル」は「深層」から「表面」へと浮上することになるのだ。「狂気—生成、無限界—生成はもはや唸りをあげる底であることをやめ、事物の表面に上昇し、非情になる」のである（LS 17）。ストア派が発見した「表面」の「効果」によって、「シミュラクルは、地下の反逆者であることをやめる」（LS 17）のだ⁽¹⁸⁾。

4.3 二つのプラトニズムの転倒の図式から導き出される帰結

以上の比較からまとめに入ろう。『差異と反復』において「永遠回帰」（すなわち第三の時間であり差異のシステム）は、イデア＝モデルの影響の及ばない、「ただ二次的な自然を構成するにすぎない諸統治と諸法則の上」にある「本源的（自然）がカオスのまま存する無底」⁽¹⁹⁾にあるものである（DR 312）。「本源的自然」としての無底のカオスとは、まさにサディズムによって目指されていた死の本能である。しかし、ドゥルーズ自身が後に問題視しているように、「強度は深さからわきあがってくるもの」（DRF 59）とみなし、「永遠回帰」がそのような無底としてのカオスそのものであると考えること自体に問題があったのではないか。

『差異と反復』において、モデルから逃れる深層で構成される「異＝他のモデル」としての永遠回帰によるプラトニズムの転倒は、「同のモデル」に対抗し、転覆する。確かに、シミュラクルは地下の反逆者であり、真の革命家であろう⁽²⁰⁾。しかし、ここにはやはり、サディズムと同様の陥穽が潜んでいるように思われる。その戦いにおいては、「同」のモデルに「異＝他」のモデルが対置されることで転倒すべきプラトニズムの「同」という土俵の上で戦うことがすでに無条件に受け入れられているのではないか。そしてそのために、第三の時間には、最終的に無限同一性としての「同」に帰着せざるを得ないような破壊性の危険性が潜んでいるのではないだろうか。ゆえに、『差異と反復』におけるプラトニズムの転倒の図式自体が『意味の論理学』第一セリーにおいても再度示されつつも、「無限同一性」として提示し直されるのではないか。むしろ、求められるべきは二重の戦い、すなわち「表象＝再現前化の世界」との戦い、そしてサディズムによって想定されていた「無底の無限同一的カオス」との戦いである。そのためには、むしろ、『差異と反復』や『意味の論理学』第一セリーで示されたプラトニズムの転倒において前提されているプラトニ的な設定自体から逃れて、差異を差異化するシステムを位置づけ直さなければならない。

したがって、『意味の論理学』における永遠回帰、アイオーンは、そのよ

うな目論見を持つドゥルーズが用いるストア派的な区別によって「表面」という新しい次元に位置づけられるのである。新たに導入されたストア派による区別は、プラトニズムの区別およびそれを基にした転倒の図式自体を解任し、そのことが「プラトニズムの大転倒」をもたらしている。このようなストア派による区別は、マゾヒズムの二つの自然の区別、すなわち「粗暴な自然」と「非人称的にして反省=反射された、感情的にして超官能的な高次の〈自然〉」に対応している。いまや、サディズムの「死の本能」とマゾヒズムの「死の本能」のあいだの「ズレ」こそが、新たな境界線となり「表面」が生まれるのである。

ドゥルーズが用いるストア派的な区別、とくに「物的なもの」についての記述にかんして、近藤智彦は、ストア派の学説を越えたドゥルーズの独自解釈である点を指摘しているが⁽²¹⁾、そのようなドゥルーズの解釈は以上のような目的意識に由来するのではないだろうか。つまり、ドゥルーズは、プラトニズムの設定自体がもつ「同」からの脱却のために、プラトニズム的区別自体、またプラトニズムにおける高所と深層のサディズム的な争い自体を「物的なもの」の側に位置づけなおし、さらにそれを原因間の統一性として定義しなおすことで無効化し、一方で「非物的なもの」という「効果」・「出来事」の領域に「異=他」のシステムを位置づけ直そうとしている。「同」の中での「同」と「異=他」の対立という構図からの完全な脱却。それは、「同に対する異=他」として同一化、全体化されることのない、絶対的な「異=他」を見出すことである。しかし、注意しなければならないのは、原因としての「物体」が不当なものとして退けられるということが主張されているのではないということだ。そうではなくて、問題は、『差異と反復』と『意味の論理学』第一セリーにおけるプラトニズムの転倒の図式に終始すること、すなわち、「二次的自然」＝「コピー」・「善いイマージュ」と「一次的自然」＝「シミュラクル」・「悪いイマージュ」のあいだのサディズム的な戦いに終始することではプラトニズムの転倒は果たされえないということである。

5. 『意味の論理学』における時間：アイオーンとクロノス

さて、『意味の論理学』では「クロノス」と「アイオーン」という二つの「永遠回帰」の時間が論じられているが、これまで議論してきたサディズム的な方法はこのうちの「クロノス」に対応し、マゾヒズム的な方法は「アイオーン」に対応しているように思われる。

5.1 サディズムとクロノス

「クロノス」は「神の時間」、いわば物的な「混合や合体の時間」であり、この時間においては「現在」だけが実在し、未来も過去も生ける現在に対して相対的な次元であるとドゥルーズは言う。「現在が自身の内に過去と未来を吸収し縮約して、縮約を重ねるにつれてますます深くなり、〈宇宙全体〉の限界に辿り着いて、コスモ的な生ける現在となる」(LS 77-78)。「生ける現在」(現実としての現在)は、広大な現在のなかで常に限られた現在であり、「善いクロノス」とよばれ、「原因としての物体の能動と深層の物体の混合の状態を計測」(LS 77)する「現在」である。そして「クロノス」における循環運動は、「〈同じもの〉の回帰としての物理的な永遠回帰に命を吹き込み、〈原因〉の知恵としての道徳的な永遠の知恵に命を吹き込む」(LS 78)、つまり「同じもの」の循環を司る。しかし、それに「一切の測度を転倒して覆す根本的な混乱、現在を回避する深層の狂気—生成」である「悪いクロノス *un mauvais Chronos*」が対立する (LS 191)。それは、生ける現在(「善いクロノス」)に従属させられていた未来と過去としての現在の報復である。つねに「善いクロノス」は内的に「悪いクロノス」の生成に脅かされ転覆させられる。ところが、ドゥルーズはプラトンに則りながらこの時間の問題点を指摘する。「生成」は「現在を避ける力」なのであるが、「生成は今生成し、「今 *maintenant*」を飛び越えることができない、「現在に対する未来と過去の復讐、これをクロノスはなおも現在の用語で表現せざるをえない」のである (LS 192)。ここにおいて、「クロノス」は自ら死ぬことを意志するのだ。

「クロノス」の苦悩はそのままサディストの苦悩でもある。サディストは「本源的自然」（一次的自然）としての「悪いクロノス」への一元化を求めている。わたしたちの経験的世界を超えたところにある狂気的な無限同一性としてのカオスの世界こそが彼にとっての本来的世界である。しかし、それは「善いクロノス」として存在する経験的世界の制度的な言葉で、また否定的な仕方ではしか論証しえないものでもある。つまり、その「現在」を否定することで「悪いクロノス」としての「未来」と「過去」を表現せざるを得ないのである。まさにそれは転倒した否定神学なのだ。そもそも「悪」に立脚することは「善」を前提してしまうし、逆もまた然りであって、それは無限に循環的な双対性に陥る。サディストが「純粹否定」を求めれば求めるほど、否定される対象もまた際立ってしまう。また、サディストは否定という拷問によって「二次的自然」に従属する他者を破壊していくのであるが、最終的にその企てが完遂されるためには、「善いクロノス」に対立するものとして思弁される「悪いクロノス」を崇め、また自らその破壊性を体現しながらも、二次的自然のうちで生を享受している以上、「善いクロノス」として存在している自分自身をも全面的に否定しなくてはならず、そこでサディストもまた自らの死を意志することになる（これがサディズムにおける自己消滅というマゾヒスティックな側面の理由である）。しかし、たとえ自死したとしても、それもまた部分否定にすぎず、「純粹否定」と呼ばれた未知のなにものかは、絶対的な思考不可能性の彼方に逃れて行ってしまいうだろう。また、さらに重要なことは、このようなサディズム的な展望では、マゾヒズムの場合のように「性のない新しい人間」として生まれ直すことができないということである。「広大で深い現在」（LS 191）にたいして「否定の広がり全体、否定の深さの全体」（PSM 24）で対抗する「悪いクロノス」の限界、深層と高所の技法であるイロニーの限界はここにある。

5.2 マゾヒズムとアイオーン

クロノスにおける深層の狂気ー生成（シミュラクル）による転覆は、「同一性とともな否定的なものをよみがえらせ」（LS 202）、「底無しの深層

と限界なき高所が相互に結合してしまうカオス」(LS 287)を形成する。これはサディズム的なカオスである。しかし、ドゥルーズが求める差異のシステムとしてのカオスは、別のところに求められなければならない。彼が目指すのは、高所の同一性か深層の同一性かという二者択一にたいして新しい道を示すことである。それが、『意味の論理学』に導入されたストア的区別によって「高所」や「深層」と切り離された「表面」という領域であり、「アイオン」という時間である。このような限界を回避し新しい時間を求めることは、「クロノス」の「永遠回帰」とは異なるもう一つの「永遠回帰」の時間、「アイオン」を見出すことにほかならない。それはまさに、2.2節で述べたような、サディズム的の死の本能、本源的な自然とズレながらも一つの次元を見出す、マゾヒズムの試みに対応している。「アイオン」においては過去と未来だけが存立し存続しており、「過去と未来を吸収する現在に代わって、未来と過去が各瞬間に現在を分割し、過去と未来へ一回で二つの方向に現在を無限に下位分割する」(LS 192-193)。また、「アイオン」は「常に既に過ぎ去り永遠に未だ来るべきもの」、すなわち「時間の永遠真理」であり、「時間の空虚な純粹形式」である (LS 194)。

アイオンにも無限があるが、それは現在を「瞬間」によって無限に下位分割することで「未来」と「過去」の二つの方向へのびる無限の直線を引くことであり、クロノスの同一性としての無限とは異なるものである⁽²²⁾。クロノスにおいて深層の狂気一生成は、現在に従属させられていた未来と過去(シミュラクル)による現在を転覆する反乱であったのだが、アイオンにおける生成は、「瞬間」によって「現在を存立する未来と過去に転倒する」(LS 193)。ここに、それぞれの生成による「プラトニズムの転倒」の仕方の差異が表れている。前者はサディズム的であり、後者はマゾヒズム的である。深層の生成である「悪いクロノス」は依然として「今」を乗り越えられない。クロノスはその周期的な測度としての「同じもの」の物理的な永遠回帰である。これに対して、アイオンは「時間の空虚な純粹形式」であり、この時間特有の「空虚な現在」ともいうべき

「瞬間」をもつ。アイオーンはその無限の下位分割可能性、それゆえに際限なく伸びる直線性によって永遠であるが、それは「純粋な出来事」の永遠回帰の時間である。上野修は、アイオーンの「瞬間」が「未来」と「過去」が限りなく一致する点であるとともに、それが生成、つまり現在を避けながら常に「なってゆく」ことそのものであるがゆえに、「未来」と「過去」のすべてを含み、それらを凝縮した点であると論じている⁽²³⁾。「なってゆく」という生成はつねに現在を避けるが、アイオーンにおいてはそれが同一性に回収されてしまうことはない。それは原因と結果の同一性が問題とならない非物的なものの効果や出来事の時間であるからだ。それは、「無限同一性に代わる不定形の隔たり」(LS 205)、肯定的な離散的総合によって各出来事を交流させる。回帰させるのは「純粋な出来事」だけであり、「特異性」だけであって、それらは「端的な〈出来事〉」、「唯一の〈出来事〉」であるアイオーンの上で交流し、「カオスモス」を形成するのである(LS 207)。「アイオーン」の描く「直線」は、その現実の現在(「善いクロノス」)だけでなく「深層」の生成(「悪いクロノス」)までも飲み込む、絶対的で無限に同一的な広大な現在としての神の時間からの「逃走線」なのだ⁽²⁴⁾。

いまや、「否定や破壊ですらなく、むしろ現に存在するものの正当性に異議を申し立て」る「否認」によって、「与えられたのではない新たな地平」(PSM 28)としての「表面」の時間「アイオーン」がその姿をあらわすのである。

6. おわりに

本稿では、『差異と反復』と『意味の論理学』とのあいだの断絶について、プラトニズムの転倒という観点から考察してきた。そのために、わたしたちはドゥルーズ自身が提示したプラトニズムの転倒の異なる二つの方

法としてのサディズムとマゾヒズムの区別を、ドゥルーズ自身に適用し、両著作におけるプラトニズムの転倒の仕方について比較しながら、両者のあいだの断絶を浮き彫りにするよう試みた。

第二節では、『マゾッホ紹介』におけるプラトニズムの転倒の異なる方法としてのサディズムとマゾヒズムを抽出し、両者において見出される「死の本能」の姿にズレがあることを明らかにした。そして、その差異が、『差異と反復』第二章において「死の本能」の別名として語られる「第三の時間」においては顧みられなくなっていることに疑問を呈した。

第三節では、前節で提起された問題について、『差異と反復』における時間の受動的総合の議論、特に第三の時間に第二節で明らかになったサディズムとマゾヒズムの区別を適用し、サディズム的な図式を脱しきれていないのではないかという点を指摘した。

さらに、第四節では『差異と反復』と『意味の論理学』それぞれにおいて試みられるプラトニズムの転倒を具体的に比較することでそれらの違いを明らかにしながら、両著作のあいだでプラトニズムの転倒の図式自体が変化していること、またそれがサディズムとマゾヒズムにおいて見いだされるべき「死の本能」の姿の「ズレ」と連動しながら、両者のあいだに「表面」という断絶を生んだのではないかと結論づけた。

第五節では、それまでの議論を踏まえて、『意味の論理学』における二つの時間「クロノス」と「アイオーン」をそれぞれサディズムとマゾヒズムに対応していることを論じ、時間論においても『差異と反復』と『意味の論理学』のあいだに看過できない断絶が存在していることを示した。以上が本稿の歩んだ道筋である。

注

- (1) 本稿は2016年12月23日に大阪にて開かれたドゥルーズ科研第三回大会（主催：研究課題基盤研究（B）「ドゥルーズ研究の国際化の形成」）での発表『差

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代
『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶としての表面」をもとにしている。また、本稿の内容の多くは修士論文「ドゥルーズ哲学におけるアイオーン概念について—『差異と反復』と『意味の論理学』の時間論をめぐって—」（2016）と重なるものである。

- (2) Gilles Deleuze, *Deux régimes de fous. Textes et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003, p.58-60. 以下、略号 DRF を用いる。また、引用にあたっては既存の邦訳（『狂人の二つの体制 1975 - 1982』宇野邦一監修、河出書房新社、2004年、p.85-89）を参考にしつつ、訳出している。
- (3) Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969. 以下、略号 LS を用いる。また、引用に当たっては既存の邦訳（『意味の論理学』上下巻、小泉義之訳、河出書房新社、2007年）を参考にしつつ、訳出している。
- (4) Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Presses Universitaires de France, 1968. 以下、略号 DR を用いる。また、引用に当たっては既存の邦訳（『差異と反復』上下巻、財津理訳、河出書房新社、2007年）を参考にしつつ、訳出している。『差異と反復』は、ドゥルーズの博士主論文であり、その審査をまって1968年に出版されることになるが、そのアイデア自体は、すでに1967年1月に開催されたフランス哲学会での公開討論で示されていること、また『差異と反復』第五章の重要概念の多くを負っているシモンドンの『个体化の哲学』についての書評の出版が1966年1月であることから、1966年頃から1967年にかけて実際にはそのほとんどが書かれたのではないかと推測される。『マゾッホ紹介』の執筆時期について、『差異と反復』とのあいだの前後関係を今のところ確定することは難しいと思われるが、『意味の論理学』については、やはり『差異と反復』のあとだと推測できるように思われる。
- (5) ドゥルーズ哲学におけるその変遷にかんしては、檜垣立哉「補論Ⅱ ドゥルーズ哲学における『転回』について」、『瞬間と永遠——ジル・ドゥルーズの時間論』（岩波書店、2010年、pp.174-194）を参照のこと。
- (6) Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch——Le froid et le cruel*, Minuit, 1967. 以下、略号 PSM を用いる。また、引用に当たっては既存の邦訳（『ザッヘル＝マゾッホ紹介 冷淡なものど残酷なもの』堀千晶訳、河出書房新社、2018年）を参考にしつつ、訳出している。
- (7) 傍点は引用者による。
- (8) 傍点は引用者による。

- (9) ドゥルーズにおける二つのカオスについて論じたものに、小倉拓也『カオスに抗する闘い』（人文書院、2018年）がある。小倉は後期の著作である『哲学とは何か』におけるカオスと『差異と反復』におけるシステムとしてのカオスの違いを検討し二つの異なるカオスを導きだし、前者のカオスに対する闘いという視点からドゥルーズ哲学全体を読み直している。一方、筆者は一貫して「ザッヘル＝マゾッフ紹介」におけるマゾヒズムの目指す死の本能とサディズム目指す死の本能が異なっていること、またサディズムにおける死の本能が「あらゆる底を越えた底無し、本源的錯乱、狂暴な引き裂く諸分子のみからなる原初のカオス」と呼ばれている点に着目しマゾヒズムとサディズムの間の差異を他の著作においても適用する形で研究を進めてきた。本論はその観点から1960年代の主著である『差異と反復』と『意味の論理学』の間の断絶としての「表面」を両者の時間論とプラトニズムの転倒の在り方を検討することで明らかにしようとするものである。
- (10) 『差異と反復』における時間論とシステム論の関連性については、朝倉友美「ドゥルーズ『差異と反復』における時間論とシステム論」（『流砂』第三号、2010年、p.97-116）を参照のこと。
- (11) Monique David-Ménard, *Deleuze et la psychanalyse*, Presses Universitaires de France, 2005, p.32.
- (12) 檜垣立哉、前掲書、p.25、およびp.46の註（1）を参照のこと。また、Monique David-Ménard, *Deleuze et la psychanalyse*, Presses Universitaires de France, 2005, p.48 および註1も参照のこと。
- (13) カント、イマヌエル『純粹理性批判』（熊野純彦訳、作品社、2012年、pp.147-163）を参照のこと。
- (14) 傍点は引用者による。
- (15) 「モデル」（すなわち「アイデア」、「オリジナル」）とは「高次の本源的な同一性を享受するとみなされているもの」であり、「コピー」（「イマージュ」）とは「モデル」との「派生的な内的類似に基づいて評価されるもの」である（DR165-166）。
- (16) プラトンはそれによって、「〈同じ〉ものと〈似ている〉ものという力に差異を従属させる決定」、そして差異はそれ自身において思考不可能であるとし、「差異を、またシミュラクルたちを底無しの海へと追い払う決定」を下したとされる（DR 166）。

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代

- (17) DR 167 の註 2 を参照のこと。なお、実際にはデカルトへの言及はないが明らかにデカルト用語であろう。
- (18) そして、ドゥルーズは「表面」に浮上したシミュラクルを「ファンタスム」と呼ぶよう提案する（これも『差異と反復』ではなかった区別である。たとえば、「(…) そのような差異的＝微分的な諸システムは、シミュラクルあるいはファンタスムと呼ばれている」(DR 165) というように、「シミュラクル」と「ファンタスム」は並立しているものの、そこに両者の差異は明示されておらず、単なる言い換えとなっている。また、ドゥルーズは『狂人の二つの体制 1975-1995』所収の「ジャン＝クレ・マルタンへの手紙——序文」(1990年に記されたもの)において、「私はシステムとしての哲学を信じている」と、また「私はシミュラクルという概念を完全に放棄した」と語っている (DRF 338-339)。
- (19) 傍点は引用者による。
- (20) シミュラクルの反乱によるプラトニズムの転倒については、鹿野祐嗣「ドゥルーズによるプラトニズムの反時代的な転倒——シミュラクルの叛乱、出来事としての *Idée*——」(『表象・メディア研究』第三号、早稲田表象・メディア論学会、2013年、pp.113 - 130) を参照のこと。
- (21) 近藤智彦「「出来事」の倫理としての「運命愛」——ドゥルーズ『意味の論理学』におけるストア派解釈」(小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』、平凡社、2008年、pp.41-57)。
- (22) アイオンの現在、「瞬間」が「実現が転覆に陥ることやそれが転覆と一体となることを各瞬間に妨げているのでなければ、どうして測定可能な実現があるだろうか」(LS 196)。
- (23) 上野修「意味と出来事と永遠と——ドゥルーズ『意味の論理学』から」(小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』、平凡社、2008年、p.23)。なお、この論文ではアイオンの「瞬間」は「アイオンの『いま』」と言われている。
- (24) しかし、アイオンはクロノスに対立するものではない。上野修によれば、「アイオンの『いま』はそこに含まれる潜在的な全未来と全過去を、クロノスが刻む時間につれて更新」し、「アイオンはクロノスにかみ合って推移しながら、そのつどそれまでの自分自身から内容的にずれてゆく」のである。上

野修「出来事の時間ードゥルーズ的コンセプト」(『時間学研究』第二巻、山口大学時間学研究所、2008年、pp.37-44)。

参考文献

Deleuze, Gilles. 1967. *Présentation de Sacher-Masoch——Le froid et le cruel*. Minuit.
(ドゥルーズ、ジル 2018 『ザッヘル=マゾッホ紹介 冷淡なものと残酷なもの』堀千晶訳、河出書房新社。)

Deleuze, Gilles. 1968. *Différence et répétition*. Presses Universitaires de France. (ドゥルーズ、ジル 2007 『差異と反復』上下巻、財津理訳、河出書房新社。)

Deleuze, Gilles. 1969. *Logique du sens*. Minuit. (ドゥルーズ、ジル 2007 『意味の論理学』上下巻、小泉義之訳、河出書房新社。)

Deleuze, Gilles. 2003. *Deux régimes de fous. Textes et entretiens 1975-1995*. Minuit.
(ドゥルーズ、ジル 2004 『狂人の二つの体制 1975 - 1982』宇野邦一監修、河出書房新社。)

David-Ménard, Monique. 2005. *Deleuze et la psychanalyse*. Presses Universitaires de France.

朝倉 友美 2010 「ドゥルーズ『差異と反復』における時間論とシステム論」『流砂』3: 97-111。

上野 修 2008 「出来事の時間ードゥルーズ的コンセプト」、『時間学研究』2: 37-44。

上野 修 2008 「意味と出来事と永遠と——ドゥルーズ『意味の論理学』から」小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』pp.20-40、平凡社。

小倉 拓也 2018 『カオスに抗する闘い』人文書院。

カント、イマヌエル 2012 『純粹理性批判』熊野純彦訳、作品社。

『差異と反復』と『意味の論理学』の断絶を示すものとしての「表面」概念について：黒木萬代
近藤 智彦 2008 「「出来事」の倫理としての「運命愛」——ドゥルーズ『意味の論
理学』におけるストア派解釈」小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／
ガタリの現在』 pp.41-57、平凡社。

鹿野 祐嗣 2013 「ドゥルーズによるプラトニズムの反時代的な転倒——シミュラー
クルの叛乱、出来事としての *Idée*——」『表象・メディア研究』 3: 113-130。